2026年６月７日（聖霊降臨後第２主日、Ａ年特定５）
メッセージ
「あなたがたの慈しみは朝の霧」
（マタイによる福音書９：９-13）

司祭ヨセフ太田信三

主イエスは今日の福音の中で、「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。」「私が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」と言われました。ここで言われている病人や罪人とは、当時、律法の基準で共同体から排除されるべき病とされた人や、律法学者やファリサイ派が重んじた「律法」を守ることができ無い人＝罪人とされ、この世界から居場所を奪われた人々でした。この人々は救いを求めていました。徴税人マタイもまた、そのような人間でした。徴税人は支配国ローマの手先となって、同胞から税を集める役割を担っていました。その役割を得るために多額の投資をしたため、徴税人は必要以上のお金を取り立て、その投資を回収する必要があったともいわれ、悪い徴税人は、多額を取り立て、私腹を肥やす者もいたようです。さらに、徴税人は異邦人に支え、異邦人との交わりによって祭儀的にも不浄であるともされ、これもまた彼らが嫌われる要因となっていました。かたや、律法学者やファリサイ派の人々は、これらの人々と関わることを避け、自分たちの正しさを保つことに努めました。一緒に食事をするなど考えられません。しかし、主イエスはこれらの人々と食事を共にしました。そして一人ひとりに神からの慈しみや愛が注がれていることを伝えました。その食卓、主イエスとの交わりによって、命が枯れ、癒しを求めていた人々に、生きた水、命の水が注がれたのです。

自分たちは正しい、病人ではないと自負し、行動していた律法学者やファリサイ派の人々は、その食卓の光景を見ても、慈しみも愛も見出すことはありませんでした。それどころか、「なぜイエスという男は、徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と、イエスを咎めようとしました。今日のホセア書にこうあります。

「あなたがたの慈しみは朝の霧　はかなく消える露のようだ。」

ここで「慈しみ」と訳されている単語は、「ヘセド」というヘブライ語です。ファリサイ派の人々のヘセドは、朝の霧のように、すぐに消えてしまうようなものでした。主イエスは今日の福音で、豊かな食卓の交わりを通して、そんな彼らにも神のヘセドを明らかにしました。これから先は、ファリサイ派の人々次第です。自分は正しいとして生き続けるのか、それとも神から離れてしまった罪人と自覚し、主の食卓に招かれるのか。

私たちもまた、「今日、私はどのようにこの礼拝に参列しているのか。」と、自らを省みましょう。